

# 比較文学研究

## 特輯 ラフカディオ・ハーン

語る女の系譜……………	西 成彦 (1)
異文化への眼差し——ウィリアム・ジョウンズ、ウ ジェース・ビュルヌフ、ラフカディオ・ハーンをつな ぐもの……………	竹内信夫 (24)
Hearn as a Critic……………	ジョージ・ヒューズ (1)
Hearn's <i>Kwaidan</i> and Sōseki's Ghost Stories……………	平川祐弘 (11)
“Hearn as a Critic” and Other Articles……………	ジョージ・ヒューズ (18)
神話研究の方法をめぐって——「神代」への視点から……………	神野志隆光 (55)
対立する神々——『古事記』における天つ神・国つ神の 対立概念に関する考察……………	矢野由利 (67)
感覚の饗宴——ガブリエレ・ダンヌンツィオと日本 の世紀末……………	平石典子 (85)
未来への郷愁——横光利一『旅愁』とオーストラリア文 学の相似……………	中村和恵 (110)
ボヘミアン文学のパリ——岩村透『巴里の美術学生』 新考……………	今橋映子 (134)
五四運動前後の中国における西洋文化の受容と 日本——与謝野晶子の「貞操論」をめぐって……………	張 競 (155)
The Realistic Void in Mishima: <i>The Play of</i> <i>Beasts and The Sought-for Grave</i> ……………	前川 裕 (34)
[書 評]	
『ラフカディオ・ハーン：その人と作品』(ド・スメ)……………	小川敏栄 (175)
<i>Wandering Ghost: The Odyssey of Lafcadio</i> <i>Hearn</i> (J. Cott)……………	河島弘美 (178)
<i>Théophile et Judith vont en Orient</i> (D. Brahim)……………	金沢公子 (183)
『精神分析の都：ブエノス・アイレス幻視』(大嶋仁)……………	吉田和久 (189)
『闇の子午線：パウル・ツェラン』(生野幸吉)……………	高木繁光 (193)
[Le Rond-Point]	
豊干饒舌——『寒山拾得』新注余説……………	古田島洋介 (197)
杉田英明氏の博士学位論文公開審査……………	山中由里子 (200)
尹相仁氏の博士学位論文公開審査……………	西川正也 (204)
陳生保氏博士論文審査会傍聴記……………	榎本泰子 (209)
「東洋のしるし、西洋のしるし」に出席して……………	稲賀繁美 (211)
八王子大学セミナー・ハウスでの研究合宿……………	崔 官 (214)
文明都市パリ・東洋語学校日本学科……………	大嶋 仁 (216)
小泉八雲来日百年記念フェスティヴァル印象記……………	平川 節子 (219)
マルティニークの旅……………	牧野陽子 (223)
欧文要約……………	(45)

# 60

## 東大比較文学會

## 「東洋のしるし、西洋のしるし」に出席して

稲賀 繁美

パリからの夜汽車は、夜が明けるともう五月の青々としたロンバルディア平原を走っている。窓越しに見える山並みには、その頂きのあちらこちらに壊れた古城が現れては消えて行く。アレッサンドロ・マンゾーニの古典的国民文学『いいなづけ』（平川祐弘訳）に登場する、その名前を呼ぶことさえはばかられた山賊の親分インノミナートも、ああした城のひとつで、ある日ふと統べる者の悲哀に捉われたのもあったろう。あたりのあまりに瑞々しい朝の日の光のなかで、かえってひ

とり旅の孤独が身に滲みる。やるせない倦怠感ただようコンパートメント。しかしやがて車窓にトスカナの山並みが迫ってくる。車輪の響きまで何とはなしにスタッカートになって、耳に甲高く鳴り始め、ようやく乗客たちも気を取り直して身づくろいに取り掛かる。ほどなく列車はフィレンツェ中央駅に滑り込む。

一年ぶりの花の都だ。指定された宿下ナルテルロはウフィッツィ美術館のすぐ隣、アルノ川に面したバルコニーからはポルテ・ヴェッキオの雑踏がすぐ下に見える。A Room with a View（ただしフォスターの時代には車の騒音はなかった）。UNESCOのTRANS-CULTURA（諸文明の相互理解のための国際機関）なるいかめしい肩書のある、でも気おけない学会）共催のシンポジウム「東洋のしるし、西洋のしるし」Signes d'orient, Signes d'occident（あめ月並み）に引っ張り出されての出張である（一九九〇年五月二十八—三十日）。

\*

シンポジウム会場は、市街を一望に見下ろすファイエーゾレの岡。中腹は、スキファノイアなる離宮。なんでもポツカチオがペストを

逃れて『デカメロン』を書いたのがこた、と縁起にあるが、憂いなき淫蕩の雰囲気もな  
くはない廢園である。さすが腐っても鯛、ヨ  
ーロッパ大学院大学(と一応訳しておく)の  
所有になるもので、庭園付きのヴィラに世界  
各地から「有職者」を招いて雑談させる。こ  
挨拶の儀式にすぎないのは例のごとくだが、  
知識人社会が仲間意識を持つヨーロッパでは、  
こうした機会に得られた知己は金では買えぬ  
「文化資本」だ。案外共通の友人が居るもの  
で、UNESCO の要職にある詩人・小説家ア  
ンリ・ロペス氏(コンゴ)などは、小生の  
旧師を「話のさかな」に、初対面から意気投  
合した。あくまで非母国語としてフランス語  
や英語を「作業言語」として用いる、という  
彼の覚悟には、故郷の口承文学を否応無く喪  
失して歪めることなくしては、その存在を世  
界に向けて語ることもできない、という二律  
背反に対する諦念が秘められていた。国際機  
関の要人にありがちなお仕着せがまじさを徹  
塵ももたぬ、その誠実な人柄も、おそらくそ  
うした喪失感に支えられているのだろう。

文学と美術の二部門からなる会議のうち、  
前者は温厚なる名「記号学者」アラン・レイ、  
後者は「少しイカレタ」前衛美術運動仕掛け  
人ピエール・レスタニが主宰。ともに旧知の  
仲だが、ふたりとも頭脳明晰・言語明瞭・百  
戦錬磨の士。内輪の酒席での議論ならともか  
く、公の場でマイク越しに彼らの(名人藝的  
な)母語に伍してやり合うのは、正直「国際  
感覚皆無」の日本国民たる小生には無理とい  
うもの。だがこれを逆手にとる秘伝をロペス  
氏から授かった次第。「国際学会にはふたつ  
不可能なことがあります。ひとつはインド人  
を黙らせることで、もうひとつは日本人をし  
ゃべらせること。その無理を皆さんはわたし  
に要求されるのですから、覚悟しておいてく  
ださい。ロペスさんは『自分はフランス語を  
話すのではなく、あるフランス語で話す』と  
おっしゃったが、私は何かフランス語に似た、  
意味だけはわかるが、わけのわからぬものを  
話します」、などと開口一番から冗談が口を  
ついて出る始末だから、我ながら、なかなか  
焼きが回ってきた。

もともと文学については江藤淳氏が出席の  
予定で、これなら大船に乗った気持ちで、と  
安心していたのが、突然の事情でご欠席。そ  
の穴埋めまでお鉢が回って来る。日本におけ  
る前衛藝術とポスト・モダンとの脈絡を、装  
飾という概念の文化負荷性を軸に説明した、  
といつても意味不明であろうが、そのうち報  
告書も出るかと思う。要するに、なぜ今井俊  
満はあななつてしまったのか、という脈絡を  
説明するのに、これは「藝術対裝飾」という  
イデオロギーを無効にするための自殺行為で  
ある、と規定してレスタニの鼻を明かしてや  
ろうという魂胆である。『ル・モンド』の美  
術記者になってしまつてすっかり墮落したフ  
イリップ・ダジャンに肩を叩かれ、レスタニ  
からは「俺より過激だ」(つまり乱暴だ、と  
いうこと)などと煽てられたが、これは担ぐ  
のが礼儀であるから、あまり本気にして自惚  
れたりしはせぬほうが良い。それでも歯に衣き  
せぬ人たちだけに、その心遣いはうれしい。  
今回パラッツォ・ヴェッキオでは、パリ在  
住の中国人画家(という以上に中国的な文  
人)ザオウキーへ「ピカソ賞」が授与され  
た(つまりこれまた残念ながら偉くなりすぎ  
た)のだが、そのオマージュの演説にまでど  
うしたわけか拙論が引用されたりして、趙師  
に背中をつつかれた。これでほどほどに義務  
は果たせたとはばかり、夜の宴会では地酒にう  
つつを抜かず。ある夜は市内の会員制クラブ  
を借り切り、またある夜は場末の大衆食堂に  
なだれ込み、またある夜はドゥオーモの見え

るテラスに陣取って、東西の若い知的戦士たちと飲み交わすのは楽しい。最近アヴィニョンやパリで勇名を馳せている詩人・画家・演出家の野人ヴァレール・ノヴァリナや中国の若手作家亞丁（なぜか四方田犬彦によく似た、おそろしく翔んだ才人）などと激論深更に及ぶと、久々にヨーロッパに居る解放感に満たされる。UNESCO お膳立ての儀式的ペーパー読みよりも、夜の部こそが面白い。

ところで『歪んだ真珠』（旦敬介訳）のセベロ・サルドウイは男色趣味のある人で、これに追い回されたのは少々参った。いっしょに詩を作ろうとしつこいので、連詩を巻いてやることにした。もっとも大岡信流ではなくて松浦寿輝流の自我の崩壊体験として、である。キューバの詩人はスペイン語で十字架の聖ヨハネを下敷きに、ぬばたまの夜（アラビアン・ナイトの暗喩もある）としての東洋なる女性への思いを託して言い寄ってくるから、蕪村の琵琶を西洋の女性に譬えて「重たき抱き心地」でもって返り討ちを食らわせる。敵もさるもの、東と西、夜と昼、闇と光をバロック調でませかえし、愛欲の情交を歌うから、当方は八朔のしろたえの衣の句をつくって、冬の雪の見立てで夏の暑さを中和させる。

少し冷静におなりなさい。三回以上恋の歌をつづけるのは規則違反ですよ、と暗示したつもりだが、「南蛮人」には通用しない。飽きずに攻勢をかけてくるから、当方は、その方チトしつこいが、それでは日本女性には嫌われますぞ、と忠告がてら、「唐衣着つつなれにし妻しあれば」でもって、外国なんぞに来るから当方は不如意である、と不服を表にし、わたし今更、靡かないわよ、と肘鉄。

恋いははかなく片思いに終わり、さしもの敵も口説くのをやめて、キプリング風に東はひがしに西はにし、と諦める。しよせん東西は理解しあえない。さあ、そうつれなく逃げられては、当方としても沽券にかかわる。ここで、敦忠卿に助けられた。「あひみての」である。「昔はものを思はざりけり」とは、なにも男女の仲のみではなくて東西の出会いについても、また妥当する真実ではあるまいか。だがそれは常に手遅れとなつてからの「後知恵」でしかない定めでもあるのだ。

実はこの学会、最初の二日間は手打ち式的なユネスコ流のきれいごとプログラムに災いされて、議事進行に精力を殺がれ、討論の暇なく、はなはだ低調だった。三日目になって、

もう日程消化の儀式はご破算にして、みんなて詩を作ろう、となった。そんなことになろうとは予想もしていなかった、セベロとの悶着が、こうして突然最終日の議題の「基調演説」になってしまったのである。我々の連詩につづいて広間にこだまするのはサイエグ（レバノン）のアラビア語詩の朗唱、中国現代詩人馬伝章の表現主義的な詩吟、ギリオの挨拶の歌、ノヴァリナの不条理な言葉たち。

アラン・レイなんぞは *Que l'Orient et l'Occident se réunissent et se trompent amoureuxment* などと書いていたが、この飛び交う声の群れを見て、今は亡き友ロラン・バルトがタンジールのバーで体験した意味をなさない音の洪水に全身全霊を浸す無為に言い及び、意味の「渡り」*injection* という壮大なる無駄にこそ翻訳の営みの究極の価値を見いだす、といった感想を述べた。言語の創造はつねにそのマージナルな部分でシステムから落ちこぼれた連中の「ずれ」として発現する。最もズレた連中の会合はこうしてようやくあるべき（不在の）場所にまでずれ込んでいったのである。最初からこうすれば良かったのに、との声もあがったが、いや、意思疎通の回路にそって透明だが無味乾燥な

音声が流れる二日間の無駄があったからこそ、今日の意味不明な音の交響がはじめて有意義にもなったのだ、という反論が出て、それが参加者みんなの偽らざる感想であった。

\*

学会会長のアラン・ル・ピション氏のお宅がフィエゾレの岡の奥深く、松林のあいだの楽園のような自然環境に憩っていた。はるか下界には遠くフィレンツェの町。もう三年来の黒い友人であるマリの社会学者ムサ・ソセナガルのグリオ、ディアメンカとともに招かれ、はたちになった利発なお嬢さんの手料理でもてなされる。庭で食事をしつつ眺める夕焼けの美しさ。「これ、これがヨーロッパにはあるもんな」とは、熱帯生まれのくせにからつきし暑さに弱いムサの詠嘆だが、こうした豊かさと余裕とは、日本にも（もはや）存在しない。

一晩の休息の後には、また「出張」の続きである。再び夜汽車にゆられて翌朝着いたパリでは、その日の午後、郊外のオーヴェール・シュル・オワーズでヴァン・ゴッホ没後百年記念行事の一環として「ヴァン・ゴッホと日本」を一席。考えてみれば、ゴッホは日本にありもしない藝術家の共同体があるとの幻想

を抱いてアルルに「黄色い家」を営んだが、その共同体は二十世紀になってから「新しき村」や「民藝」に「後知恵」として実現したのではなかったか。そうした壮大な「渡り」の縁で自分もまたヨーロッパに「渡って」きて、こうして皆さんにお話できたのを何かな思議に思います。そんな講演の後、主催者経営のベニッシュ（石炭運搬船）を改造した水上レストランでシャンパンを抜き、オワーズ河上の宴。駆け付けてくれた清水康子夫妻をはじめとする面々と「国際的」談笑を交すうちに、おりから夏の到来を告げる大雷雨となる。一期一会。不思議な縁を育む、忘れられない一夕となった。（平成三年二月記）